る学術・文化の中心地です。市は 14 の区に分けられ、ネッカー川の南に東西へ拡がる旧市街は、ベルクハイム区（西側）とアルトシュタット区（東側）から構成されています。ベルクハイム区はアルトシュタット区よりも歴史は古く、いわばハイデルベルク発祥の地です。元ＫＵＷＶベルクハイム編集長としては外せないポイントです。ハイデルベルク城へは、マルクト広場近くの駅からケーブルカーに乗って５分あまり。城からはハイデルベルク旧市街を一望できました。第二次大戦の連合軍による空爆を受けなかったので、古い街のたたずまいがそのまま残っています。ネッカー川に架かるカール・テオドール橋の対岸の丘には「哲学者の道」が望めました。橋のたもとにはバロック風のブリュッケ門があります。この城門は、かつての城壁の一部だそうです。今は、城壁は残っていませんが、14 世紀には現在の旧市街を囲むように城壁が築かれていたそうです。午後は、ハイデルベルク大学の新キャンパスが拡がるネッカー川北岸のノイエンハイム区へ。このキャンパスには、自然科学系の学部や医学部の他、研究者用のゲストハウスが点在しています。広々とした新キャンパスの一角にあるレストランで、ビールとピザのお昼。昼食後は旧市街に戻り、ハイデルベルク大学の学生食堂内の特設会場の大型スクリーンでドイツ X アルゼンチン戦を観戦。試合が近づくにつれ、街も会場もすっかりワールドカップ・モードに。ドイツ国旗のトリコロール（黒、赤、黄）が街に溢れていました。私たちもドイツの小旗とトリコロールのレイを買い、ドイツを応援しました。応援の甲斐あってアルゼンチンに圧勝！チューリッヒへの帰りの ICE の食堂車でも祝杯。頬にトリコロールのフェイス・ペインティングをした可愛いドイツ娘が給仕をしてくれました。

ヨーロッパや中国では、市街地の周囲が石やレンガの城壁で囲まれた城郭都市が発達しました。城壁の中で城主を始め市民も生活を営んでいました。ハイデルベルクも現在は城壁こそ残ってはいませんが、そうした城郭都市のひとつだったわけです。以前訪れたポルトガルのエヴォラやスペインのアビラも、当時の城壁をそのまま残す城郭都市でした。日本では城郭都市は発達せず、領主だけが城郭を持って武士や町人は城の外（城下）に暮らすという形態が一般化しました。今回ハイデルベルク大学を訪問して、ハイデルベルク大学も「お城の中の大学」だということが分かりました。ただ、それは「城郭都市の中の大学」だということです。ポルトガルのエヴォラにも、エヴォラ大学が城郭の中にありました。ヨーロッパの他地域や中国にも、城郭都市の中にある大学が存在するのかもしれません。

金沢大学のホームページの「K-Dictionary 沿革」には、今でもこう記載されています。「お城の中の大学　世界でたった２校？実はほんの 20 年前まで金沢大学は角間の地にありませんでした。どこにあったかというと、なんと場所はいまの金沢城跡。当時はドイツのハイデルベルク大学と並んで世界にたった２つしかない『お城の中の大学』として全国に知られていました。」どうして、金沢大学がハイデルベルク大学だけを取り上げたのでしょうか。「必ず一次資料に当たる」、「現地で事実を見極める」のが研究者の基本です。近代以降のハイデルベルク大学が城壁にすら囲まれていなかったことを金沢大学の関係者は知っていたはずです。金沢もハイデルベルクも、空爆を受けず古くからの家並が残る緑豊かな街、文豪が愛し文化の薫り高い街という共通点を持っています。マイヤー・フェルスターの『アルト・ハイデルベルク』は日本の旧制高校生の愛読書でもありました。ゲーテが恋に落ち、ヘーゲルやマックス・ウェーバーが思索をしたハイデルベルク。こうしてみると、金沢大学の関係者がハイデルベルク大学に親しみを持ち、同一視しようとした心情は十分理解できます。憧れも含め

「ドイツのハイデルベルク大学と並んで世界にたった２つしかないお城の中の大学」と称したのでしょう。金沢大学は、おそらく領主の居城の中にある世界で唯一の大学です。こんな贅沢な大学は世界で金沢大学だけでしょう。「世界で唯一の大学だった」と過去形で言い換えなければならないのは残念です。今さらながら「お城の中の大学」で学生時代を過ごせたことは素晴らしい経験だったと思います。お城の中の大学でなければ、我々の「ワンゲル坂」も生まれなかったわけですから。

２．オックスフォード

2011 年８月、イギリスのオックスフォード大学を訪問する機会がありました。英語圏最古の 38 のカレッジから成るオックスフォード大学には、２万人強の学生が在籍しています。

８月７日(日)、ロンドンのパディントン駅から電車でオックスフォードへ。オックスフォード市内北部にある大学院専門のウルフスン・カレッジ(1966 年創設)を訪問。モダン・カレッジなので設備は新しく快適です。敷地も日本のひとつの大学ほどの広さがあり、カレッジの隣には牧場が拡がっていました。敷地内には小川が流れボートハウスもあり、森の中ではリスを見かけました。私たちはカレッジ内にあるゲストハウスに泊まりました。

８月８日(月)、カレッジ内の食堂で朝食後、カレッジの図書館や研究室等を見学。施設が新しいので、日本の大学とあまり変わらない印象を受けました。市の中心部にはオールド・カレッジが集まっています。今晩泊まるコーパス・クリスティ・カレッジ（1517 年創設）へ移動。クライストチャーチ・カレッジ（1546 年創設）とマートン・カレッジ（1264 年創設）に挟まれたオックスフォード大学で最も小さなカレッジです。石造りのカレッジ内のゲストハウス（ロイヤルスイート並みの広さにびっくり）に荷物を置いた後、このカレッジのニール・マクリン先生にカレッジ内を案内してもらいました。教会、ハイテーブルのある大食堂、中庭、図書館、マクリン先生の研究室等、500 年近い歴史を感じさせる荘厳なカレッジ。映画ハリー・ポッターの世界です。先生は、正午からご自身が委員長を務める４年に一度の大きな学会の始まるお忙しい身でしたが、ご丁寧に対応いただき、そのホスピタリティには本当に感心しました。

ハイデルベルク大学もオックスフォード大学も、古いキャンパスはそのまま残し、新しいキャンパスは郊外へと拡大していきました。金沢大学の城外移転の理由が「教育、研究環境が手狭になった為」ということであれば、何故、城内キャンパスはそのまま残し、郊外に新キャンパスを作らなかったのでしょうか。残念でなりません。かと言って、今から角間キャンパスを城壁で囲って「お城の中の大学」と称しても誰も喜ばないでしょう。これからの基幹大学は、世界と地域に開かれた大学でないと生き残れないと言われています。オックスフォード大学やハイデルベルク大学では外国から多くの学生を受け入れています。また、ハイデルベルク大学では、高齢者・市民向けの講座も開催され、たくさんの社会人が学んでいます。「お城の中の大学」だった歴史を大切にしつつ、金沢大学が、世界と地域に開かれた大学として発展していくことを願っています。